

## コラム：19世紀アフガニスタンの対周辺国関係

登利谷 正人

現在のアフガニスタンの混乱の原因のひとつとして、戦争や内乱が続いた結果生じた多くの地方軍閥による支配があげられる。これらの軍閥の支持基盤の多くがアフガニスタンに利害関係を有する周辺各国である。アフガニスタン全土の各地方に形成された軍閥勢力に対し周辺各国が支援を行うために内乱が激化するという構造は、すでに19世紀からその萌芽が確認できる。ここではその一例として、19世紀前半にパシュトゥーン人のムハンマドザイ支族のコハンデル・ハーン（1793/4～1855年）とその同母兄弟たちが中心となって現在のアフガニスタン南部地域を勢力圏としたカンダハール政権と、アフガニスタン西部の主要都市ヘラートに数度にわたって侵攻したイランのカージャール朝との関係を取り上げ、近代アフガニスタンの対周辺国関係を検討するための一助としたい。

19世紀前半のアフガニスタンは、1818年に宰相の地位にあったムハンマドザイ支族のファトフ・ハーン（1778～1818年）が、その権勢の拡大を恐れたカームラーン王子（?～1842年）によって殺害されたことをきっかけに、ファトフ・ハーンによってアフガニスタン全土で権力を確立しつつあったムハンマドザイ支族がこれに反発し、いわゆるアフガン内乱（1818～1826年）が勃発した。この内乱によってサドザイ朝（1747～1818年、1839～1842年）は崩壊し、アフガニスタン国内は混乱に陥った。主要都市であるカーブル・ヘラート・カンダハールはそれぞれ独立した勢力が支配するところとなっていた。カーブルには1834年に支配権を獲得しアミールを名乗っていたムハンマドザイ支族のドースト・ムハンマド・ハーン（在位：1826～1839年、1843～1863年）が、カンダハールには既述のごとくコハンデル・ハーンとその同母兄弟たちが中心となったカンダハール政権が、そしてヘラートには1818年までカーブルで王位にあったサドザイ支族のカームラーン王子とその宰相ヤール・ムハンマド・ハーンがそれぞれ独立した勢力を形成し、これら3勢力が鼎立してアフガニスタン全土の支配権をめぐる対立が生じていた。このようななかで、当時インドを植民

地としていた東方のイギリス、西方のイランのカージャール朝、そして北方の中央アジアに進出していたロシアがそれぞれの利害関係にもとづいてアフガニスタンに干渉していくことになる。

当時のイギリスは、中央アジア全土を支配下に治めつつあったロシアのアフガニスタンへの影響力拡大と自国の植民地であるインドへの進出を危惧し、アフガニスタンをイギリスの支配下に置くことを望んでいた。またイランのカージャール朝は、歴史的にイランとの関係が密接な西部の都市ヘラートを支配下に組み込むことを目標としていた。1832年に皇太子アッバース・ミールザー（1789～1833年）がホラーサーン遠征を行った際には、息子のムハンマド王子をヘラート方面へ進軍させている。この進軍はアッバース・ミールザーが急逝したために中止されたが、その後カージャール朝の国王として即位したムハンマド・シャー（在位：1834～1848年）は再度のヘラート進軍と同地の占領に大変な関心を抱いていた。このようなカージャール朝の動きは、インドの防衛を重要課題としていたイギリスにとって大変な脅威であったことは間違いない。

このヘラート進軍に際して当時のカージャール朝が目をつけたのが、カンダハールのコハンデル・ハーンとの関係強化であった。前述のように、当時アフガニスタン国内ではカーブル・カンダハール・ヘラートの3勢力が鼎立し、全土の支配権をかけて相争っていた。つまり、ムハンマド・シャーはカンダハール政権と連携してヘラートを挟撃しようと考えたのである。当時のカージャール朝とカンダハール政権間で交わされたやり取りについては、イラン外務省に保管されている外交文書史料からその内容の一部を確認することができる。ここではそれらの外交文書史料の記述内容から、両者の関係を概観していくことにする。1836年12月4日にムハンマド・シャーからコハンデル・ハーンに送られた書簡は「ヘラート攻撃のためのイラン軍とカンダハールのサルダールたち（コハンデル・ハーンとその同母兄弟に対する尊称）との同盟の提案」という文言で書き始められており、その内容もヘラート攻撃の際にイラン側が供出する軍隊について、その人数についてまで具体的に述べている。こうしてヘラートに対する利害関係が一致したためにカージャール朝とカンダハール政権は同盟関係を結ぶこ

とになる。お互いの同盟締結の条件についてのやり取りなどが交わされ、1838年2月にコハンデル・ハーンはカージャール朝との同盟締結に同意する協定書をイラン側に送っている。この同盟締結に関する興味深い点として、コハンデル・ハーンが協定書のなかで「ロシアの全権公使の立会いの下…」と記していることから、当時のロシアの全権公使シモニッチがコハンデル・ハーンとの同盟締結の協定書作成に立ち会っているという点があげられる。当時のロシアはカージャール朝のヘラート進軍を強く支持していたため、コハンデル・ハーンのカンダハール政権とカージャール朝との同盟関係締結の仲介役を担っていても不思議ではない。

実はこの同盟が締結される前年の1837年7月には、すでにムハンマド・シャー率いるカージャール朝軍はテヘランからヘラートへ進軍を開始し、11月にはヘラートを包囲していた。しかし、イギリス側がヘラートのカムラン王子を強く後押ししたために、ヘラート包囲戦は長期化していたのである。これはロシアが支持するカージャール朝がヘラートを攻略した場合、ロシアのアフガニスタンに対する影響力が拡大することをイギリスが恐れたためであった。このような状況下でコハンデル・ハーンが同盟締結に同意する協定書をムハンマド・シャーの下へ送ると、早速ムハンマド・シャーから具体的にヘラートに向けて進軍するよう命令が届けられた。さらに、カージャール朝がヘラート攻略に成功した後は、カンダハール政権にその支配権が委ねられる旨も外交文書には記載されている。

しかしながら、イギリス側はカージャール朝のヘラート攻撃を中止させるべく、1838年の夏にペルシア湾のハールグ島に軍船を派遣して圧力を加えてきたために、同年9月にはムハンマド・シャーはヘラート攻略を断念して撤退を余儀なくされた。これによってカージャール朝のヘラート攻略は失敗に終わった。このヘラート包囲は、この後アフガニスタンを中心とする地域で英露が支配権をめぐる争いが繰り返される、いわゆる「グレート・ゲーム」の引き金となった事件であった。この際にカージャール朝・ロシアの対ヘラート戦のために利用されたのが、アフガニスタン国内の勢力であったカンダハール政権であった。カージャール朝の撤退時にもコハンデル・ハーンは「コハンデル・ハーンとイラン政府との連帯」と題する書簡

をムハンマド・シャー宛に送っている。これは明らかにカージャール朝と同盟を締結したことによって、イギリスと敵対することになってしまったコハンデル・ハーンが自らを見捨てることがないようにイラン側に呼びかけるものであったと考えられる。

ヘラート包囲によって、イギリスはロシア・カージャール朝の勢力がアフガニスタンに進出することを現実の危機と考え、カージャール朝がヘラートから撤退した翌月の1839年10月にはインド総督オークランドがシムラ宣言を発して、アフガニスタンをもイギリスの支配下に置くべく第1次アフガン戦争(1838～42年)を開始した。イギリスはインド亡命中であり、サドザイ朝の王位経験者であるシャー・シュジャー・アルムルク(在位:1803～1809年, 1839～1842年)を傀儡として再度アフガニスタンの王位に就けるために、英領インドからアフガニスタンへと侵攻した。当然ながらカンダハールもイギリス軍の進軍の対象となったため、コハンデル・ハーンと兄弟たちはやむを得ずカージャール朝への亡命を決意することになった。この亡命を願い出る書簡も「イラン政府に対する亡命の要請」と題する書簡でその内容を確認することができる。そのなかでは、カンダハール近郊に展開していたアフガニスタン側の軍隊がイギリス軍およびシャー・シュジャー・アルムルク陣営に次々と投降していく様子が記されるとともに、自分たちのイランへの亡命を許可するように嘆願する内容が書かれている。この後コハンデル・ハーンとその兄弟たちはイランへ亡命し、第1次アフガン戦争末期の1842年に再び帰国してカンダハールの支配権を得ることに成功するまではカージャール朝の庇護の下イランにとどまることになる。同時期のヘラートにおいても、カームラーン王子を殺害して実権を掌握したヤール・ムハンマドがカージャール朝を政権の後ろ盾としたことから、対立するカンダハール・ヘラートの両政権ともにカージャール朝との関係を最も重視していた点は興味深い。その後、コハンデル・ハーンは亡くなる1855年までの間カンダハールを統治し続けるが、その死後に生じた後継者争いなどの混乱に乗じて、ドースト・ムハンマドがカンダハールを占領することになるのである。

本稿では19世紀前半に半独立状態にあったカンダハール政権とイラン

のカージャール朝との関係を中心に對周辺国関係を概観することを試みた。この150年以上前のアフガニスタンをめぐる周辺各国との関係は、現在の地方軍閥と周辺国との関係に非常に似通っていることに改めて気が付くのではないだろうか。もっとも、現在のアフガニスタンにおける周辺各国の利害関係は第1次アフガン戦争期とは比較にならないほど複雑になっており、地方軍閥に対する周辺各国のかかわりもより密接なものとなっている。しかし、アフガニスタンをめぐる周辺各国の介入政策が今後どのように展開していくのか、このような歴史をふまえ注視していかなければならないと思われる。

(注) 本コラムの執筆に際しては全体を通して以下の論文を参照した。

小牧昌平「ヘラートのヤール・モハンマド・ハーン—19世紀中期のイラン・アフガニスタン関係史—」『東洋史研究』第65巻第1号、2006年、78-103頁。